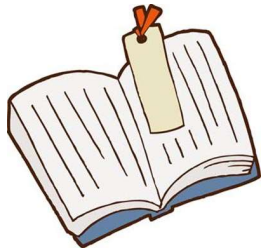

「コンクール」（読書）

―作品と自分との対話―

夏休み前の七月に出品した読書感想文の内五名の作品が入賞しました。

読書は、自分の心の扉を開きます。登場人物は読む人に語り掛けます。「あなたはどうなの？」新しい自分と出合う、心の対話を楽しみましょう。

新潟県課題図書読書感想文コンクール

最優秀賞　二年
優秀賞　四年
優良賞　六年
佳　作　三年
佳　作　六年

※今回は、優秀・優良賞の二編を掲載します。

まほうのえんぴつを使える人に

四年

「マララのまほうのえんぴつ」って、いったいどんな話だろうかと、題名を見た時に、そう思いました。

読んでみて、最もしょうげきを受けたのは、マララさんが武器を持った男たちにじゅうでうたれた場面です。マララさんは、じゅうを向けられた時、とてもびっくりして、とてもこわかったと思います。じゅうでうたれてしまうなんて、とてもかわいそうだと思いました。

今、ぼくが生活している地域では、武器を持った人たちが近くにいるということも、ましてや、じゅうでうたれるということも、想像できません。マララさんがしたのは、悪いことではなくて、自分たちの住んでいる所では、勉強したい人たちが自由に勉強できないということを、手紙やテレビなどで世界中の人に知らせたということです。ただそれだけのことで、じゅうでうたれたということにも、とてもおどろきました。

マララさんは、じゅうでうたれたけががなおった後も、子どもたちの学ぶけんりと未来のために声をあげ続けています。

ぼくには、今まで、勉強したいのにできないということはありませんでした。もし、ぼくがマララさんと同じような立場だったら、どうするだろうか考えてみました。今のぼくは、「勉強したいのにできないのは嫌だなあ。」とは思っても、マララさんのように、そのことをいろんな人に知ってもらって、勉強できるように変えていこうなんて思いつきません。こんなことを思いついてやったマララさんは、本当にすごい人だなあと思います。

マララさんが世界の人たちに自分たちのことを伝えるのに使ったのは、「まほうのえんぴつ」です。でも、この「まほうのえんぴつ」は、テレビアニメのように、ほしい何かをいつでも何回でも出せるものではありません。そんなえんぴつは、実際にこの世の中では作れません。マララさんがやったのは、世界中の人に向けて手紙やインターネットに書いたり、話したりしたことです。

マララさんは、「まほうのえんぴつは、自分の言葉と行動の中にある」ということに気付いたと言っています。ぼくは、マララさんは、自分が思ったことや考えたことを文字や声で言葉にすること、そして、それを人に伝えることの二つが、実現したいことをかなえる「まほうのえんぴつ」と同じ役目をすると考えたのだ思います。

ぼくは、この本を読んで、「まほうのえんぴつ」をつくる方法を思いつきました。それは、マララさんのように、「何かしたい」と強く思って、どうしたらいいかを一生けん命考えることです。マララさんのように世界の人に伝えることはできないと思いますが、ぼくも、人のことを考えて、「まほうのえんぴつ」を使える人になりたいです。

課題図書「マララのまほうのえんぴつ」

自分の色を大切に

六年

「ここならできる」

院内学級に通う小学一年生の女の子の詩にある心の喜びだ。安心できる居場所を見付けた感動が伝わってくる。

院内学級とは、様々な事情で学校に通えない、年齢も様々な子供たちが学ぶ病院内の学校だ。この短い言葉から、学校に通えない悔しさと悲しさで弱くなってしまった心が、再び自信に満ちていく姿が浮かぶ。ぼくの中では、薄まってしまった感覚だ。この言葉にどきんとした。

院内学級の子供と、ぼくの置かれた状況は真逆だ。ぼくには、一人でできることがたくさんある。授業中も休み時間も、家に帰った後も自由に使える。自分の意思で。また、一緒に悩んだり喜んだりできる仲間もたくさんいる。なのに、「いつでもできる」「いつでもいる」という、その場の空気に流されてきたのかもしれない。大切なものを「空気」のように考えていたことが恥ずかしい。

この本に出てくる、赤はな先生こと副島賢和先生は、院内学級に務めている学校の先生だ。子供たちが心の奥に閉じ込めた「自信」、生きる意欲を取り戻す手伝いを惜しまない。人の心を動かす人だ。それも、言葉の力で。

赤はな先生の使う言葉、その土台にある考え方は優しさだ。優しさと言うと、今までは、相手が心地よく感じる言葉や態度等ぐらいにしか思っていなかった。でも、これは、相手を自分より弱い存在として、優しくしてあげる「与える」態度ではないだろうか。一方、赤はな先生の優しさは違う。相手を丸ごと受け止める。変な言い方だが、否定も肯定もしない。どっちでもない受け止め方だ。

学校に行くのが不安で「行きたくない」と訴えている子供の感情を包み込む。そして、その背景や原因を相手の立場で想像する。その上で、その感情が上手く解決できる「道案内」をするのだ。ただ、どう進むか決めるのは本人だ。だからこそ、本人に自信が生まれる。相手を「自分とつながりがある」存在として意識する同じ方向を見て歩む優しさだ。これが「当事者意識」だ。

ぼくの学校では、困っている友だちを助けたり励ましたりしたことを掲示板に貼り出して温かい感情を広げる運動をしている。確かに、何かをしてあげる「あげる」ことも優しさだ。でも、赤はな先生の言う「当事者意識」の優しさなら、どうなるだろうか。一見、赤はな先生の、一緒に悩み解決策を考えることは、時間と手間が掛かることのように思える。「急がば回れ」のことわざの意味するように、じっくり考える時間はとても貴重だ。前に、ぼくのお母さんが、「障がいがある子が学んでいる姿で、こっちも楽しくなる」と言っていた。一緒の目線で、一緒に悩み感動する時間は、価値ある時間だ。きっと、ぼくの周りにも、赤はな先生のような友だちや大人がいる。今まで気付かなかった赤はな先生との出会いを大切に、本当の優しい優しさを広げていきたい。宮子の取り巻きの女の子たちと似ているぼくだけど、少しずつこすり合わせながら、自分色を大切に育てていきたい。

課題図書「赤はな先生に会いたい！」

令和元年度　新潟県県競書大会

特　選	２年
準特選	１年
金　賞	３年
金　賞	６年